1500年続く山の集落から学ぶ

人新世におけるコミュニティ・レジリエンス

金山智子 編

さいはて社

目次

はじめに　10　金山智子
プロジェクトのいきさつ　10
根尾という地域　11
本書の内容　13

I　コミュニティ・レジリエンスと社会生態系　17

人新世時代のコミュニティ・レジリエンス　18　金山智子
地域に求められる新たな考え方　18
撹乱された社会生態系　20
コミュニティ・レジリエンスと文化の関係　24
レジリエンス思考からみる長期的変化　26

II　文化の継承とレジリエンス　32

水の分配システム――生きる源の共有　34　吉田茂樹
山からの水の恩恵　34
水源調査　36
飲用等の水の確保と利用　44
田畑用の水の確保　45
水システムに必要な要素　46
素材の進化の恩恵　50
根尾の水システム　52

共同体の維持装置としての神社とまつり　54　金山智子
儀礼的コミュニケーションの発達　54
在住者のいない集落と人のつながり　57

伝統文化の継承とコミュニケーション――根尾盆踊りと多様な交流　62　王芯藍
消えかけては復活する根尾盆踊り　63
根尾踊り保存会の活躍　64
多様な交流の場へ　66

音頭取り70年――吉田喜作さん（根尾盆踊り保存会会長）　68　金山智子

神事芸能の継承とコミュニティ・レジリエンス　72　金山智子
能郷の能・狂言の概要　72
多様な地域のつながりによる継承　74
新型コロナの影響による変化　75

根尾能郷集落の能・狂言――二重の継承システム　80　堀江洋生
能について　80
狂言について　83
二重の継承システム　85

III　分解・循環されるいのち　88

人と自然との共存による多様な分解　90　金山智子
畑のプロテクション　91
水・エネルギーの自給自足　92
不意な訪問者のための展示　93
集落で共有　93
クリエイティブリユース　94
棲みやすく分解リフォーム　95
シェアハウスのすすめ　96
新しい風景の創造　96
記憶の手がかり　97

分解の現場から——所孝一さん　100　小林孝浩
分解者を訪問する　100
コラム：ところさんのある一日　102
地域に残されるその役割と仕組み　108
コラム：分解について（AIとの対話）　110

人新世におけるふたつの循環　112　小林玲衣奈・小林孝浩
解体の技法　112
廃棄物を追う　114
ふたつの循環　116

熊と山と仕事と——松葉五郎さん　118　金山智子
熊の肉　120
生きものと植林とお金　122

IV　レジリエンスとトランスフォーメーション　126

時代に合わせた仕組みの変化　128　吉田茂樹
水システムの利用と管理の変化　128
電気を作ることの変化　130
暮らし方の変化　139
変化としなやかさ　141

古い集落に学ぶコミュニティ・レジリエンス　144　金山智子
繰り返される適応サイクル　144
深層文化に基づく自治　145
伝統知の更新　148
住む技術　151
包括的視点をもつアクター　152
絶やさぬ小さな試行と革新　154

おわりに　158　金山智子

執筆者紹介　164

はじめに

プロジェクトのいきさつ

私たちは、岐阜県本巣市北部の山間部に位置する根尾（ねお）地区（旧根尾村）を対象とするプロジェクト「根尾コ・クリエイション」を二〇一五年から実施してきた。根尾は、少子高齢化や産業衰退など、多くの中山間部が抱える問題に直面している地域である。他方、千五百年の歴史をもつ豊かな文化資産を抱える地域でもある。プロジェクトでは貴重な地域の資産を活かして、デザイナーやアーティストといった人たちと共に新しい何かを創造していくことを目的として活動した。空き家を生かした場作りや、長老の語りをきくワークショップ、最新のテクノロジーを用いた地域アートや伝統芸能の継承など、プロジェクトはそれなりに成果をあげ、一定の評価も得ることができた。

しかし、プロジェクトを開始して三年を過ぎた頃から、何か違和感をもつようになった。私たちが新たに生み出したものよりも、地域の人たちの暮らしの中には、すごいと思うものや面白いと感じるものがある。フィールドワークでそういったものに遭遇した時の驚きだけでなく、それらに対するプロジェクトメンバーの興味関心が年々強まっていった。例えば、根尾の各集落で、山奥の渓流や湧水を集め、数百メートルにも及ぶ長い配水パイプを敷設し、各家に分配するシステムも自分たちで構築し、当番制や有志によって管理・補修しながら長年にわたり使い続けている。これは私たちが強く関心をもった事例の一つであるが、完備された上下水道を、料金を支払って使う水道システムに慣れてしまった私たちにとっては目を見張るものがあった。一見シンプルだが、水という最も重要なインフラを自分たちで管理運営するという自治の仕組みを持ち続けていることへの驚きであり、羨望すら感じた。

旧根尾村は、近代以前から、十数世紀にもわたって存在し続けてきた。平安、戦国、江戸、明治、昭和、平成、令和と時代は変遷し、近代になると、太平洋戦争、濃尾地震、そして伊勢湾台風といった有事を経験した。林業衰退や市町村合併により、多くの人たちが山を降り町へと移り住むようになった。急激な近代化と経済成長の潮流に翻弄されながらも、この地域は現代まで存続している。そういった地域がなぜ千五百年以上もの長い歴史の中で、繰り返される社会的変容に耐えながら、今も生き残ってこられたのか、私たちはそこに疑問を感じた。先に挙げた水の分配システムは、地域の人たちが長い時間の中で築いたもので、今も生活文化の中に息づいている。そこには時代の変化を生き抜いてきた「力」があるに違いないと考えるようになった。この課題意識に呼応するタイミングで、二〇二〇年にはブライアン・ウォーカーとデイヴィッド・ソルトの『レジリエンス思考――変わりゆく環境と生きる』が出版された。私たちは、地域の「力」をウォーカーらの「レジリエンス」として捉え直し、二〇二〇年から新たに「コミュニティ・レジリエンス・リサーチ」プロジェクトの始動へとつなげていった。

プロジェクトでは、根尾のフィールドワークを通してコミュニティ・レジリエンスとは何かを探求していくことを目的としている。社会を人と自然がつながっている社会生態系システムとして考え、これからの持続可能な社会には、レジリエンス能力のある社会生態系システムが必要であると主張するウォーカーらのレジリエンス思考に依拠している。

根尾という地域

能郷白山・屏風山・左門岳一帯は岐阜県本巣市最北に位置しており、ここを源流域とする根尾川沿いに広がる中山間部地域が私たちのプロジェクトが対象とした根尾地区である。起源は古く、縄文時代にまで遡るが、樹齢千五百年の淡墨桜（うすずみざくら）や近年出土された土器などから、千五百年前にはあったとされる。二〇二二年現在、根尾には三一の集落があり、一二三一人がここで暮らす。福井県境にある温見峠付近を源流として多くの支流を合わせ南流する根尾西谷川と、左門岳から南流する根尾東谷川が合流して根尾川となり、根尾地区、さらに南下した本巣市に豊かな水をもたらしている。総面積の九五パーセントが山地で、しかもその大部分が急傾斜の樹林地であり、母岩の風化分解によって生じた土壌が山肌を覆っている。根尾の山は、かつて栃やブナといった落葉広葉樹の森林であった。しかし、戦時中に軍需目

的で乱伐され、戦後には政府主導で造林事業が推進され、ブナといった広葉樹はほとんど伐採され、杉や桧が植林されていった。結果、根尾の山は、日本の多くの山林同様、針葉樹に埋めつくされた山へと変貌したのである。

根尾東谷川上流の上大須ダム（中部電力奥美濃水力発電所）は、建設反対運動や補償交渉で竣工までに一九年を要したが、ダムによる税収は村民負担の軽減と手厚い行政を実現する基盤となった。同時に、村民の行政依存を強める結果にもなった。二〇〇四年に根尾村（二〇三六人）は本巣町（八二六六人）、糸貫町（一万一八四六人）、真正町（一万二一五三人）の三町と合併し本巣市となった。合併は当初から大きな財政負担となった。合併十年目に市の住民数は三パーセント微増したが、旧根尾村では約二〇パーセントの減少（一六〇〇人）となった。合併当時、根尾地区の高齢者率は三八パーセントを越えていたが、十年で根尾地区の高齢者率は四〇パーセントを越えた。

主産業は農業、林業、建設業である。山間の土地をうまく利用しながら稲作やジャガイモ栽培を中心に行っているが、農業従事者の高齢化や鹿や猿など獣害の拡大により離農がすすんでいる。かつて盛んだった林業は、現在は間伐中心となり、その間伐材も安価な輸入材の流入のあおりを受けて使われずに放置されている。このような状況で、砂防ダムや流路工の建設、道路工事が中山間部にとっての貴重な収入源となっており、公共工事への依存体質は依然として変わらず、地元に残る若者たちは地元建設業で働くものも多い。市町村合併により根尾地区の過疎化は急速にすすみ、全集落の四割以上が限界集落となり、結果、この地域に人口激減、超高齢化、空き家、後継者不足といった課題を引き起こしている。

私たちがプロジェクトを開始した当時千六百人ほどだった住民も、二〇二二年には千二百人ほどに減少した。二〇二二年には根尾小学校と根尾中学校が合わさり、一貫校「根尾学園」となった。近年は、豊かな自然資源を活かした観光業に力を入れているが、観光客は桜の時期に集中し、一年を通した観光は難しい。また、類似の観光施設が多く設置される中で、魅力は低下し、宿泊客は減少する状況にある。ふるさと創生事業の交付税を使って一九九五年に開業した温泉宿泊施設「うすずみ温泉四季彩館」も、もともと来館者数が減少していたところに、新型コロナ感染症により経営的な打撃を受け、二〇二三年三月に休館となった。

このように見ていくと、根尾は問題が山積し衰退している地域であることは確かである。一方で、次々と問題が起きていながらも、根尾に住み続けることを選ぶ高齢者たちや、新たに根尾を住処（すみか）として選び移住する若者や家族もいる。私たちのプロジェクトでは、さまざまな問題に直面しながらも存続している地域という側面にフォーカスしていった。

本書の内容

本プロジェクトは大学の教育研究として位置付けられており、メンバーは教員と学生によって構成されている。このプロジェクトのユニークな点は、アート、デザイン、メディア、コミュニケーション、地域、エンジニアリング、ネットワークなど、メンバーの研究分野や関心が多様なことである。コミュニティ・レジリエンスという共通テーマの下、各メンバーはそれぞれの関心からアプローチしていった。したがって、調査方法に関しても、長期にわたって特定の人を対象にオーラルヒストリーを収集する、地域イベントに自ら参加しながら参与観察する、地域の人たちとの共食を通して話を収集する、自身のアート作品を森に設置し経年変化を観察する、一つのモノが分解され流通していく過程をマルチサイトで考察する、等々、既存の調査法に縛られない多様な手法を組み合わせていった。ゆえに、プロジェクトの成果である本書も一般的なテキスト中心の報告書形式ではなく、写真や絵、物語やエッセイといった多様な表現方法を採用しながら、私たちがプロジェクトで見つけた知見を包括的に表現することを試みた。

本書は主に四つのパートから構成される。第Ⅰ部では、プロジェクトの中心概念である「コミュニティ・レジリエンス」について、その視点から考察する必要性について説明し、研究の理論的視座となる「社会生態系システム」について、ウォーカーとソルトのレジリエンス思考を中心に解説する。これ以降に続くパートは、調査から見えてきた根尾のコミュニティ・レジリエンスについて三つの点からまとめた。第Ⅱ部では、根尾の住民たちが長い時間をかけて築き、今も大事にしている仕組みや文化について「文化の継承とレジリエンス」という点から考察を行った。第Ⅲ部では、使われなくなった家や物と

いったものが、長い時間の中でどのように分解され、そして新たな役割を得て循環されていくのかについて、「分解・循環されるいのち」としてまとめた。最後の第Ⅳ部では、過去、現在、そして未来に向けて、どのように変化あるいは変容していくのか、コミュニティのトランスフォーメーションという点から検討を行い、調査から見えてきた根尾のコミュニティ・レジリエンスについて論じた。

本書では、根尾の長老であり、重要な人たちの語りをコラムとして組み込んだ。七年間、多くの方々にフォーマル、インフォーマルな形で話をきいてきた。コラムとしてとりあげた人たちは、長く根尾に暮らしながら多様な変化を体験しており、彼らの長い経験から見えているものはまさに社会生態系という視点で地域をみることの重要性であり、その視点をもって語る人たちなのである。したがって、彼らの語りを通して、根尾のコミュニティ・レジリエンスについて理解してもらうことを読者に期待したい。

二〇二二年一〇月、プロジェクトでは成果の一部を企画展「ねお展：アジール（自由領域）としてありつづけた地域のこれまで　そして　これから」として、岐阜県博物館にて展示した。七年にわたる調査から私たちが見出した根尾を、「アジール」というコンセプトの下、根尾の人たちとともに様々な表現によって伝えた。一つの地域を特定のテーマにまとめることの困難さと責任を感じる一方で、地域の多様な面を包括的にみせることで伝わるものがあることを、展示に参加したり見たりした根尾の人たちは感じていた。本書では、企画展同様に、多様な関心をもって行ってきた調査から得た様々なデータをもとに包括的にまとめた。はるか昔より存在し続けている地域から、いま私たちが学びうるコミュニティ・レジリエンスとは何かが読者に伝わることを切に願う。

末筆ながら、長きにわたって私たちのプロジェクトにご協力くださった根尾の方々のご好意と熱意に、深く感謝の意を表する。

（金山智子）

おわりに

二〇一四年に、根尾に移住した本学の卒業生から、廃校になった根尾長嶺集落の長嶺小学校が耐震問題で使えなくなったが、何とか活用できるようにできないかと相談されたことが、私たちが根尾に関心をもつきっかけであった。相談の大本は、長嶺集落に住む元根尾村長である所和徳さんであった。九年ほど前、初めて見た長嶺小学校は、百年もつ宮材（みやぎ）を使った木造校舎で、なんとも言えない趣を感じ、校庭のすぐ先を流れる根尾川は底が見えるほど透明で、この素晴らしい環境に触れて、あまり深く考えずに、何とかしたいと返事をしたことを覚えている。

これをきっかけとして、二〇一五年から本学のプロジェクトとして「根尾コ・クリエイション」を立ち上げ、五年間にわたり実施した。さらに後継プロジェクトとして「コミュニティ・レジリエンス・リサーチ」を三年間実施した（長嶺小学校については、耐震調査や工事の費用の問題で、二〇二〇年に解体され、現在は学校の碑と二宮金次郎の銅像以外には何も残っていない）。

そもそも私たちのプロジェクトは、根尾という豊かな自然と文化のある地域の可能性に注目し、教員と学生、外部のクリエーター、そして地域住民が共に何か新しいものを創造していくことを目指していた。しかし、根尾に関わっていくうちに、想像をはるかに超える時間、地域に生き続けている自然と文化に強く魅力を感じ、それが本書の基底の研究課題となったのである。

二〇二二年一〇月には、研究成果の発表として、岐阜県博物館で『ねお展：アジール（自由領域）であり続ける地域のこれまで　そして　これから』と題した企画展を開催した。タイトルの「アジール」という言葉は、私たちが根尾という地域を表現する一つのキーワードとして選んだ。その背景には、福井の山を越えてきた人たちは、清流や森の恩恵を受けながらこの地に定住し、集落の発展とともに文化的な営みを創造し、根尾という地として自治と独自の文化社会を形成し、大災害や産業衰退、市町村合併や人口減少など、抗（あらが）えない社会的変化に見舞われながらも、そこで生の営みを続けている人たちであり、そのことを表現したかったからに他ならない。

本書では「アジール」という言葉はここまでに一度も説明していない。しかし、その要素は随所に埋め込まれている。アジールという言葉にはさまざまな定義や意味があるが、私たちが最も大事にしていたのは、「自由な領域」であることだ。それは、統治からの逃避、住民自治、自由な生活の技術と表現、異人の間（あわい）であり、それらは本書のさまざまな箇所で読み解くことができると思う。

私たちは、根尾を素晴らしい地域、あるいは、見習うべき所であると主張したいのではない。むしろ、日本全国をみれば、根尾のような地域は数知れず存在している。根尾はその一つに過ぎないのである。日本に昔からある山

間の古い地域をどのような視点でみていくのか。その一つが、私たちが研究の中心においた社会生態系システムという概念であり、それはレジリエンスという視点に支えられている。自然の中で現実世界の日々を生きてきた人々には、本研究で使用しているような概念や言葉がなくとも、おのずと備わってきた考え方や作法があり、コミュニティの長い歴史の中で培われてきたさまざま事象や、変容に向けた対応や失敗を何度となく繰り返しながら、その時々で地域社会とともに生き抜いてきたのである。その中から、自分たちで柔軟に対応していく力が蓄積されてきたということが理解できた。このことは、当たり前と捉えられ、現代社会においては看過されがちだが、実は、コミュニティのレジリエンスを考える上で大事な点なのである。その意味において、少なくとも本書を通じてその重要性を学術的な知見として示すことができたと考える。

本プロジェクトに所属した教員や学生たちのみならず、地元の多様な生活者である地域の方々の参加と協力によって、実践されることをつうじて到達できた知見は、特定の研究にかかわる方法論を用いたことで得られたものではない。超学際的であろうとする包括的な視座に立ち、主観性や客観性といった社会科学的な王道的ともとられる調査研究のスタンスを一端脇に置いて、現地の人たちとのコミュニケーションを重視しながら進めてきたからこそ得られたものである。このようなアプローチを採用した結果得られた知見を本書が示すことについて、さまざまな意見があることは承知している。しかし、こういったアプローチによってでしか見えないものがあると信じている。

本書で示した研究成果のひとつひとつは私たちのプロジェクト成果の一部に過ぎない。私たちのプロジェクトには、ここに書ききれないほど潤沢で、貴重な輝きを秘めた、たくさんの根尾の方々のご協力に支えられている。本書をしめくくるにあたり、これらの方々のお顔を思い出しながら、深く感謝の意を表したい。とりわけ、長きにわたってご協力いただいた所和徳さん、松葉五郎・恵美子ご夫妻、葉名尻義一・紀子ご夫妻、吉田喜作さんと根尾盆踊り保存会のみなさん、高橋保直さん、上杉勝司さん、松葉秀治さん、金子典栄さん、所孝一さん、吉田雄樹さん、そして羽田すみさんに、心からの感謝を申し上げたい。また、本書の執筆者ではないプロジェクトメンバー（平塚弥生、カルティカ・メノン、鄧玉潔、松村明莉、楊慶新）の活動も本書に含まれていることをここに記しておきたい。

最後に、この本の出版を快くお引き受けいただいた、さいはて社の大隅直人さんに御礼を申し上げたい。大隅さんは、ねお展にも足を運んでくださり、表現を大切にしたいというわがままを汲み取ってくださったことにあらためて感謝したい。

（金山智子）

執筆者紹介

路雨嘉　挿絵担当

初めて根尾に行ったのは２０２１年の春です。フィールドワークの経験がほとんどない私は、最初、遠足の気分で山の奥の集落を訪れました。何度も訪れるうちに、根尾への理解は徐々に明確になり、この小さな集落についてもっと知りたいという意識も出てきました。暑い海岸地域の都会に育った私にとって、集落に暮らす人たちの人生話を聞き、彼らの生活環境、古い家の内装、世間に対する考え方、自然や自然界の生き物に対する考え方などを観察すると、まるで自分が今まで受けた教育とはまったく違う視点から教育を受けたようで、いろいろなものの見方が変わりました。

情報科学芸術大学院大学博士前期課程修了（メディア表現学修士）、長野県大町市北アルプス国際芸術祭実行委員会事務局

堀江洋生　文担当

根尾の研究に関して想うことや感じていることなど：かねてより興味があった能・狂言の演者の方から直接話を伺うことが出来た。大きく変化してきた外部環境の中でも、脈々と継承されてきた根尾の文化活動の一部を紐解くことを試みたが、これまで自分が持ち合わせていた物事をみる時間軸がいかに短いものであったかを痛感することとなった。根尾で得た視点をもとに、今後は他地域の文化活動もみていくことで、地域の持続可能性について引き続き探究したいと考えている。

情報科学芸術大学院大学博士前期課程修了（メディア表現学修士）、アワイ合同会社代表

小林玲衣奈　文担当

放置された空き家の姿は、想像していたよりも衝撃がありました。土地や場所というものに関心を持っていたので、家がそこにいた人の暮らしを写しとっていて、それが朽ちつつもまだほのかに残り続けている姿にとても興味を持ちました。そして朽ちているのにも関わらず、自然と馴染んでいっているようにもみえ、住む人がいなくなったことによって壊さなければならないという制度とは反対に、むしろ自然な行いのようにも思えました。フィールドワークや研究を重ねる中で、根尾という場所が持つ豊かさが好きになっていました。そして、知れば知るほど、それは根尾にとってほんの一部であると同時に、空き家のことをひとつとっても、私の生活からかけ離れているものではなく、どこか地続きで繋がっていることに気が付きます。コロナ禍という制約がまだ残る中での研究だったので、また根尾を訪れてみたいと思っています。

情報科学芸術大学院大学博士前期課程修了（メディア表現学修士）、シビック・クリエイティブ・ベース東京［CCBT］

王芯藍　文担当

２０２１年、初めて根尾盆踊りの練習会に参加した。その時、伝統文化と歴史を感じる踊りと唄、そして地元住民の熱意に深く魅了された。その後、一年以上に盆踊り練習会の参加と根尾踊り保存会の出来事を記録し続けていた。さらに、盆踊りを通して、地元の住民との結びつきが深まりした。地域住民が一堂に集まり、踊ることで、地域の人々が一体感を持ち、交流を深めるきっかけとなることを体験した。地域の人々が協力して準備し、祭りを盛り上げることで、地域の絆が強化される様子に感銘を受けた。この点において、私は地元の人々と共に協力し、根尾盆踊りの継続と発展に貢献したいと強く思っていた。また、盆踊りは地元の伝統文化を体験できる貴重なイベントであり、日本文化を感じたい外国人にとっても魅力的なものだ。これまでの経験を通じて、日本の文化や地域社会が私の生活に影響を与え、新たな繋がりを提供していた。現在、私は遠く住んでいるが、いつかは根尾に戻りたいとずっと考えている。

情報科学芸術大学院大学博士前期課程修了（メディア表現学修士）、旅行業インバウンド事業企画担当

金山智子　全体編集／文担当

９年前にあるきっかけから根尾と関わることになった。その時、根尾という小さな窓の向こうに、想像をはるかに超える長い長い時間の中で、人と自然によって築き上げられてきた強靭なシステムがあることなぞ、思いもよらなかった。人による営みが、良くも悪くも、時代を超えても、大きな意味をもち続けるという、最も大事なことを根尾は教えてくれた。

オハイオ大学大学院コミュニケーション研究科テレコミュニケーション専攻博士後期課程修了（マスコミュニケーション学博士）、情報科学芸術大学院大学教授

小林孝浩　文担当

近年の大きな関心事は、自宅の農地活用。農地利用の実態を確認しつつ、自身の専門を活かした、現代での活用法を探索している。この視点を持って根尾地区に入っていくと、理想的な生活スタイルがあちこちに見え隠れした。豊富な山の沢水を引き、不具合が生じれば個人の力で補修する。壊れた農具は近隣の知り合いに何度でも直してもらい、使い続ける。新しい技術を取り入れつつも、これに頼りすぎない。刹那に変化する経済的価値から切り離された、より普遍的な価値観が通底していた。根尾の知恵やマインドに倣い、自身の活動を充実させていきたい。

岐阜大学大学院工学研究科電子情報システム工学専攻博士後期課程修了（工学博士）、情報科学芸術大学院大学教授

吉田茂樹　文担当

子どものころから道具や仕組み、技術に興味があった。根尾に関わるようになった時も、暮らしの中の道具や仕組み、生活の中で使われている技術に目が行くようになり、根尾の水システムやそれを支える部品や素材、かつての水力発電から現在の太陽光パネルに至るまで調べることとなった。いつの時代も技術の普及で生活が変わり、よりよい暮らしを求めて新たな道具が作られてきたことにあらためて気づかされた。

豊橋技術科学大学大学院工学研究科建設工学専攻修士課程修了（工学修士）、情報科学芸術大学院大学教授

坂本あゆみ　扉写真撮影

情報科学芸術大学院大学博士前期課程修士２年

林晨　扉写真撮影

情報科学芸術大学院大学博士前期課程修士２年

※所属や肩書き等は執筆当時のものです。

Sample

1500年続く山の集落から学ぶ
——人新世におけるコミュニティ・レジリエンス

発　　行　2023年 9月30日
編　　者　金山智子
発 行 所　さいはて社
Website: https://saihatesha.com
E-mail: info@saihatesha.com
Tel: 050-3561-7453
Fax: 050-3588-7453
編　　集　大隅直人
デザイン　HON DESIGN
組版・校正　TSスタジオ

Copyright © 2023 by Tomoko Kanayama, Shigeki Yoshida, Wang Xinlan, Hiroki Horie, Takahiro Kobayashi, Reina Kobayashi
ISBN 978-4-9912486-2-7